介護老人保健施設

あいの郷だより

2026年度
秋号

<CONTENTS>
2、3　DX化特集～施設でのDXに対する取り組み(リハビリ、事務、相談)～
4　施設内行事、作業活動～季節の作品作り～、編集後記

R8年10月9日発行



DX化の取り組みについて

介護老人保健施設　あいの郷
事務長　勇　仁

最近よくＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）という言葉を耳にすると思います。ＤＸとはデジタル技術を活用して、ビジネスや業務そのものの変革に取り組み、組織の競争力を高めることで国も推進しています。

当施設においても今後の働き手不足を想定し、生産性の向上や残業・経費等の削減を目的に少しずつＩＣＴ（道具）の導入は行っていますが、まだＤＸ化と言うには程遠い状況です。

さて、ひと昔前の１９８５年に日本で公開された映画「ターミネーター」をご存知でしょうか。その映画では２０２９年に人類と機械軍の戦争が起こっており、主人公が１９８４年にタイムスリップして、未来のヒーローを守るというＳＦものだったと記憶しています。

それから時が流れ、最近のニュースでは中国のロボット運動大会で１００ｍを８．６４秒で走るロボットの映像に驚かされましたが、ＡＩが進化したことに伴い、人型ロボットの発達が著しく、まさに１９８５年のＳＦ映画が現実へと移り変わってきた感があります。

人型ロボットについては、少子高齢化が進む中、家庭での家事支援や介護分野での実用化も進んでいくようですが、その一方、ＡＩ開発者等からはＡＩの暴走による危険性の発信も多くなり、不安な面も出てきました。

ただ、健全なＤＸの発展は続くかと思われるので、当施設でもＤＸ推進に不可欠なセキュリティ・リスクマネジメントの面にも十分配慮しつつ、その実現につなげていきたいと思います。

施設内行事

七夕



7月18日に七夕の行事を行いました。ご利用者様に短冊に願い事を書いていただきました。「健康でありますように」「あいの郷で穏やかに過ごせますように」「宝くじが当たりますように」等、様々な願いが書かれていました。

ゲームでは、彦星、織姫に願いを届ける七夕にちなんで、玉入れを行いました。男性利用者様には彦星、女性利用者様には織姫になりきっていただき、合計点を競うゲームを行いました。

「負けないわ」「頑張るよ」と声が聞かれ、皆さま積極的に玉を投げていました。七夕を感じることができ、笑顔あふれる行事となりました。



夏祭り



今年もあいの郷では夏祭りを開催しました。ご利用者様と一緒に「炭坑節」や「東京音頭」を踊り、音楽に合わせて手拍子をしたり、身体を動かす姿が見られ、会場は笑顔でいっぱいになりました。

また、職員によるソーラン節も披露しました。ご利用者様から大きな拍手や温かい声援をいただき、会場はより一層盛り上がりました。職員もご利用者様の楽しそうな笑顔に元気をもらい、日頃の感謝の気持ちを込めて精一杯踊りました。

「夏を感じることができた」と喜びの声も聞かれ、ご利用者様と一緒に素敵な思い出を作ることができました。



秋のクイズ大会



9月の行事として、「秋のクイズ大会」を開催しました。今回は、秋にちなんだものや季節を感じられる内容を中心に、様々なお題からクイズを出題しました。

八つのチームに分かれて、答えを相談しながら「これは知ってる！」「どっちだったかな？」と、真剣に考えている姿が見られました。正解が発表されるたびに歓声や拍手が起こり、会場は大いに盛り上がりました。さらに、外れてしまったチームには楽しい罰ゲームも用意され、普段とは違った一面を見せてくださる方もいらっしゃいました。

ふれ、楽しみながら交流を深めることができました。

たくさんの笑い声があ

編集後記

暑さも和らぎ、秋の気配を感じる季節となりました。朝晩と日中の気温差が大きくなるこの時期は、体調を崩しやすく、夏の疲れが出やすい季節でもあります。

食事や睡眠を大切にし、体調の変化に気を付けながらお過ごしください。

広報誌担当一同

作業活動　～季節の作品作り～

写真立て

段ボールを切り、色を塗ってオリジナルの写真立てを作りました。仕上げに飾り付け用のビーズを使い、皆さま自由にデコレーションされておりました。

皆さまのセンスが感じられる、個性豊かな写真立てが完成しました。





【施設のＤＸ化について】

当施設では、介護の質向上と業務効率化として、ＤＸ化への取り組みを段階的に進めてきました。本号では、ＩＣＴを活用した取り組みの概要とＤＸ化がもたらす効果について、ご紹介します。

介護事業のＤＸ化と現場の課題

日本の高齢化社会が抱える課題については、皆さまも日頃から意識されているところであり、「２０４０年問題」も、すでに広く知られた論点です。近年の報告では、２０２４年、65歳以上の人口は、３．６２４万人で高齢化率は２９．３％に達したと、国の調べでした。将来推計では、65歳以上の人口は、２０４３年頃にはピークを迎え、その後減少に転じると推計されております。しかし、総人口が減少する中で、２０４３年以降も高齢化率は上昇を続け、２０７０年には、３８．７％に達すると予測されております。（令和７年版介護白書より）

そのような中、介護人材の確保は深刻な問題となっており、２０４０年までには２８０万人の介護人材の確保が必要で、将来的にも介護人材の不足は避けようがない課題です。

この課題に対し打ち出した国の政策が、介護現場のＤＸ化となります。ＤＸ化の目的としては、慢性的な人材不足に対応しながらも、サービスの質を落とさず提供し続けることです。しかし、介護現場には、ＤＸ化を推進する人材が少ないこともあり、ＤＸ化が正式に施策として打ち出されて６年が経過しましたが、十分に活用できているかと言えば、浸透しきれていないことが正直なところです。

このような中、当施設でも、記録を電子化しタブレットを導入、ＩＣＴ機器とナースコールを連動させるなどの取り組みを行いました。また、２０２４年には、見守りシステム　ライフレンズの導入を行いました。今日までに、ＤＸ化のための機器の導入は進みましたが、現場での運用はまだまだ軌道に乗り切れておらず、十分に使いこなせているとは言い難い状況です。

今後は、運用面での課題を整理し、現場での活用が定着するよう体制の整備や、研修等を進め、その効果を確実に発揮できるような環境づくりに邁進したいと思います。

ＡＩモーションのその後

リハビリ部門　室長　五十嵐　志織

ｉＰａｄで５回立ち座り、片足立ちの動画撮影を行うことでＡＩが動作を分析し、その人にあった運動メニューを提案してくれるソフトを２０２４年11月に導入しました。

導入から約２年経過しますが、現在も介護度が要支援のご利用者様を中心に定期的に測定を行っています。継続する事で運動の成果をみることが出来るようになり「今回もニコちゃんマークだった。」や「もう少しここがよくなればいいわね。その為にはどんな運動がいいのかしら？」と測定結果シートを楽しみにして頂いており、意欲的な運動に繋げることが出来ています。また、ＱＲコードから撮影した動画をみることができケアマネージャー様にも状態がわかりやすいと評価頂いています。

今回の導入で比較的動ける方の評価をＡＩで短時間で行いお勧めの運動を提供できることで、リハビリ職員は１対１での機能向上訓練や生活動作練習等に時間をかけることが出来るようになりました。これからもＡＩなどのＩＣＴ機器を上手く活用しながら、サービスの質の向上が図れるように努力していきます。

※測定希望のご利用者様がいましたらお声がけください。

※立ち座りの動画撮影だけでも解析が可能です。



結果をもとにその人に合った練習メニューを提案します。



1ヵ月ごとの記録を分かりやすく追うことが出来ます。

ケアプランデータ連携システムについて

事務部門　係長　長谷部　保次

ケアプランデータ連携システムとは？

居宅介護支援事業所と介護サービス事業所との間で毎月やり取りされるケアプランの情報を、データ連携するシステムです。サービス提供票や居宅介護サービス計画書など、これまで、手書き、印刷し、ＦＡＸや郵送でやり取りしていた書類をシステム上でデータの送受信ができ、業務軽減負担や経費削減が期待できます。

ケアプランデータ連携システムは介護情報基盤との統合を予定しており、統合後は介護ＷＥＢサービスの一機能となります。介護情報基盤において、事業所におけるケアプラン情報を利用者、医療機関、自治体が電子的に閲覧することで、関係者間での要介護認定に必要な書類等が円滑となり、要介護認定に要する時間が短縮されます。

また、サービス利用時における複数の証の提示が簡素化され管理・提示する負担が軽減されます。本人の適切なケアの提供が可能となり、介護サービスの質の向上が期待できるようになっています。

高齢化に伴い介護需要が高まる一方、人口減少から介護人材の不足が見込まれています。今後、介護人材を増やし続けていくことは困難であることから、介護分野における生産性向上は必須となっています。介護サービス事業所職員の事務負担の軽減を図るため、「ケアプランデータ連携システム」の活用が期待されています。

介護現場での取り組み

相談部門　係長　白石　学

「生産性の向上」

介護現場では、働く人が少なくなる中でも、ご利用者様に安全で質の高いサービスを提供する事が求められています。そこで進められているのが、デジタル技術を活用して仕事の進め方を見直す「ＤＸ化」です。

令和６年度の介護報酬改定では、ＩＣＴ機器や介護ロボットなどを活用して、職員の負担を減らし業務を効率化する取り組みを評価する「生産性向上推進体制加算」が新しく設けられました。「見守り機器・インカムシステム・介護記録ソフト」の３つの器機の導入が加算要件です。

これらを使うことで、間接的な業務を減らし、直接的な業務（ご利用者様の精神的ケアや機能向上につながるリハビリ等の関わり）を増やすことが目的です。



〜「ＬＩＦＥ」とは何か〜

また、＊ＬＩＦＥ（科学的介護情報システム）＊という仕組みもあります。ＬＩＦＥでは、利用者の状態や介護サービスの内容など全国の施設より情報を集めて分析し、よりよいケアを考えるために活用します。

ＬＩＦＥと生産性向上推進体制加算は、同じ制度ではありませんが、どちらもデジタル技術やデータを活用して、介護の仕事を効率化し、満足度を高めることを目指しています。

このような効率化は、施設だけではなく在宅生活にも活かすことで、住み慣れた地域や自宅での生活が続けられるようにあいの郷では取り組んでいます。

介護保険制度では聞きなれない言葉が多くあります。不明な点は、遠慮なくお問い合わせください。